高室成幸の「お邪魔します」対談

第１回　介護保険の２０年をどう評価する？

ゲスト　㈱カラーズ田尻久美子さん

介護・医療・福祉分野でユニークな活躍で注目を集める
キーパーソンを迎えてのざっくばらんな本音の対談！
はじまりはじまり・・・！！！
第１回は東京都大田区で大活躍の（株）カラーズの田尻久美子さんです。

介護保険２０年をどう評価する？

高室

介護保険が始まって 20 年間、介護業界の人も本当にいろいろ頑張ってきました。でも気がついたら「やってはきたけれどこんなはずではなかった」というジレンマがケアマネさんや訪問介護の方に感じます。でも新しいことを始めなければ 5 年後も今のままになります。ジレンマの中でもどのようなアクションをしていくかということについて今日はお話ししたいと思っています。田尻さんはどのように思われますか？

田尻

そうですね。先生はどう評価されていますか？

高室

私は介護の社会化はかなり成功したと思います。私がサラリーマンの時は日本福祉大を卒業しているというので、障がい者の家族や親の介護について内緒で相談に来る仲間がいました。それが今ではファミレスや駅に集まったおばちゃんたちが「母が認知症になってね」と普通におしゃべりする時代になりました。これはすごいことです。

樋口恵子さんも言っていますが、かつては「介護は嫁」が一般的でしたが、それが今では配偶者か息子か娘。嫁は最下位です。

田尻

本当にそうですね。

高室

もちろん課題はありますが、仕事をしながらの子育て、介護をしながら働くということが社会的に語られるようになってきました。ですから私は社会的な意識としてはよくなったと思います

田尻

私は平成 12 年当時は IT 業界にいました。介護保険ができて数年してから介護業界に入りました。まさしく有資格者の需要がうなぎのぼりの時代でした。とにかく人を派遣するという時代でしたね。その中で、だんだん求められるものが変わってきていると感じています。

訪問介護に新たに突きつけられる課題とは…

高室

それは今から 15 ～ 6 年前ですか。

田尻

そうです。以前はお世話型の風潮が強かったように思います。お世話型から今は自立支援がテーマになってきました。介護職も求められるものが多様化、多機能化してきています。

これからの介護職にとって大事になってくるのはエビデンスですよね。根拠あるケアがどう利用者さんの自立につながるかをきちんと打ち出していかないといけません。

高室
同感です。ただそのことに対するジレンマはありませんか？

田尻
う～ん。自立支援ですか……。
介護職の教育が今までは技術中心の教育でしたから今後は基本的な考え方や、考えをきちんと表現し伝えること、マネジメントなどがこれから求められることであり、とても必要なことだと思います。これらを身につけることがこれからの課題だと思います。
介護職を辞めていく原因にはリーダーシップや経営者などリーダーの問題も大きいと思います。現場は、きちんとマネジメントや

高室
それはリーダーを担える人材が育っていないということですか？

田尻
そうですね。

高室
育っていないというよりも「育ててこなかった」のではないでしょうか？

田尻
そうです。業界が技術、主にハンドケアを重視してチームのリーダーを育てられていない。
もちろん福祉に関する思想というのはいろいろ教えてきていると思いますが、仕事をする上での教育がなされていない部分があります。リーダーに恵まれなくて介護業界を離れるという話を聞くと残念だなとすごく感じます。

「ありがとう」という感謝の言葉について考える

高室
この業界に入る理由を、「ありがとうと言われるからこの仕事をやっているんです」と話す人を何人も聞きました。それに私は一抹の違和感をずっと感じてきました。

田尻
どうしてですか？

高室
「ありがとう」は言われるほうは確かに嬉しいでしょう。言ってるほうはどんな気持ちですか？と利用者に尋ねると、言い続けているとみじめになってくる、情けないという声を聞いたりします。「またこんなことを頼まなくちゃいけない」ってね。つらいですね。
でも言われているほうは「ありがとう」の言葉が心地いい。そこにとても大変なジレンマがある気がします。このズレはどうしてできると思われますか？

田尻
そうですね。今でもヘルパーの中にそういう方はいらっしゃいます。自分が満たされたいがために介護職をやる。自分が今までつらかったからその穴を介護職で感謝される言葉で埋めたいという方がいます。

高室
いますよね。自己肯定感が低い分、利用者から感謝されると自分が役に立っていると実感する方がいますね。

田尻
いますね。自己満足に感じることもあります。

高室
主観とはいえ、決して悪いことではありません。気がかりなのは「ここまでやったのにあの人は言ってくれない」
「ここまでやってるのに何でクレームを言われなきゃいけないのか」と不満を抱いてしまうことです。

田尻
そうですね。間違っていますね。自分がちゃんと評価される仕事をするということが第一ですからね。そういう方は評価基準が間違っていますね。

高室
介護保険スタート当時は家政婦紹介所で訪問介護を始めたところも多かったです。それが影響しているのでしょうね。

田尻
やっぱりお世話型できたことを思うとそういうことに原因があるかもしれませんね。お世話する人とされる人という関係性のままにきている人がいると思います。

高室
それが苦情にもつながるのです。こちらは自立支援と思っていても「どうしてこれくらいやってくれないんだ」と不満に思う利用者もいます。そこを伝えきれないヘルパー側のジレンマもあるのではないでしょうか？

田尻
介護保険第４条「国民の義務として自ら健康増進しなくてはいけない」という部分が伝わっていない。

高室
憲法でも読んでる人は少ないのに介護保険制度を読んだ人はもっと少ないでしょうね。

田尻
そういう意味では使い方上手になってもらうための利用者さんに対する広報とかも必要ですね。

高室
広報？

田尻
教育でしょうか。公的な制度に対してもっと小さいうちから教えていくことも必要です。社会全体で支え合う仕組みだと理解が足りていない。

高室
具体的にどういう仕かけがあればいいと思いますか？

田尻
小中学校から福祉に関すること、社会保障の仕組みとかをもう少し理解するような授業を取り入れることは必要だと思います。

高室
でも今の子どもに教えて、彼らが社会を支えるこの年齢になるのは２０年後です

田尻
長いですね。（笑）

高室

長いですよ。もちろん小学校の内から教えることは大事です。今これからの 10 年先、15 年先を考えたときにジレンマはあるわけですが、「できない、むずかしい」とずっと言っているだけでは愚痴っていることでしかないわけですからね。何とかしなければいけないと思います。

高室

愚痴になっているところをどうにかするためには何かのアクションを起こさないといけません。今はじめることが 10 年先～ 15 年先のアクションにつながるのです。

田尻

なるほど、そうですね。

高室

自分も還暦を越えて、15 年後には当事者となるわけです。

田尻

先生、還暦を越えられたのですか？

高室

そうです。61 歳です（笑）。

田尻

先生、還暦を越えられたのですか？

高室

そうです。61 歳です（笑）。

田尻

びっくりしました！　見えないですねぇ。エネルギーが、バイタリティーがあるから･･･

高室

ありがとうございます（笑）。今後は、集いの場づくりや通いの場づくりなどの新しいチャレンジが、これからの国民の介護への意識を変えることになると期待しています。

カラーズ
COLORS

（株）カラーズ
〒143-0015　東京都大田区大森西 6-2-2　ST ビル 1 階
http://www.colors-g.co.jp/

高室成幸の「お邪魔します」対談

第２回　地域とつながることと利用者を支えること

ゲスト　㈱カラーズ田尻久美子さん

介護・医療・福祉分野でユニークな活躍で注目を集める
キーパーソンを迎えてのざっくばらんな本音の対談！
はじまりはじまり・・・！！！
第１回は東京都大田区で大活躍の（株）カラーズの田尻久美子さんです。

地域共生社会と介護事業者としてのあらたな挑戦

高室
田尻さんは訪問介護分野でどのようなアクションをされていくつもりですか？

田尻
私個人の考えは、カラーズは介護事業者という枠をなくして「地域の生活にどこまで根差すことができるか」ということを意識していきたいと思っています。ドミナントエリアは大田区です。何か困り事があった時、「大田区にはあそこがあるよね」と言ってもらえる会社にしたいです。

高室
そのために、すでに始めてらっしゃることはありますか？

田尻
小学校で夏休みの講座をやっています。

高室
介護教室ですか？

田尻
障がいの体験学習や寸劇をやっています。地域包括ではないのですが、認知症の人への理解を促進するような、地域包括的な発信もしています。また、研修センターではママ・パパから赤ちゃんへのタッチケア教室も定期的にやっています

高室
いいですねぇ。

田尻
商店街ともつながりがあって、近いうちに商店街の人と大田区提携都市の長野県東御市に田植えに行きます。梅屋敷米を作るというプロジェクトもあるんですよ。

高室
いいですねぇ。

田尻
業界の枠組みの中だけでやっているのではなくて、垣根をなくして地域住民の暮らしを知っていく。そこに必要なものを提供できるようにしていかないといけませんね。世の中が共生社会になってきています。それにはすごく賛同しています。「あなたのこの相談には乗れるけれどこちらの相談には関与しません」というのは違うと思うんです。

高室
同感です。

田尻
ですから会社のスタッフ達にも、「ケアマネジャーはケアプランを作る人じゃないからね。介護保険の枠組みの中でだけ物事をとらえていたら置いていかれちゃうよ」とずっと話をしています。

高室
そうですね。

田尻
ケアマネジャーは第一線に立って地域にどんどん出ていかなければなりません。地域の住民がやっているイベントにもカラーズは結構な確率で参加しています。

高室
それは自主的に？それとも給料を支払ってですか？

田尻
自主的に行ってくれる場合もありますが、年に 2 回ぐらいは勤務扱いにしますから必ず参加してくださいと言っています。ケアマネさんも嫌がることなく、もう当たり前のようになってきています。

高室
それは田尻さんのマインドが建前でないからでしょうね。とかく社会福祉法人も社会福祉法が変わったから、社会貢献活動に参加しましょうとみな慌てて取り組んでいるところも多いですね。
「生き残る」ために社会貢献を頑張るのではなくて本来の法人のミッションとしてやる時期が来たのではないか、と思います。

田尻
仰る通りです。そういう意味では地域自体を底上げしたいという気持ちで連絡会をやっていると思います。自分たちもモデルを作って小さい事業所でもこういう風にやれたよと見せていくことがほかの地域でも実践できるという自信につながります。

高室
おっしゃるとおりです。

田尻
私も全国団体（全国介護事業者協議会）にも参加していると、いろんな地域でいろんないい活動をしている方がいらっしゃいます。そういう活動をもっとつなげていきたいという思いはあります。

地域共生社会は「新しいつながりづくり」の時代

高室
私は今連載している「月刊ケアマネジャー」で「つながりのデザイン術」というタイトルの連載をしています。はじめはケアマネジャーがどうつながるかを書こうと思いましたが、少し違うと思いました。そうしたらケアマネさんがしんどくなるばっかりです。

田尻
確かにそうです。

高室
つまり、利用者さんがもともとあったつながりをどう復活させるか、事業所とどうつながればいいか、家族さんがどういう人とつながればいいか、事業所同士をどうつなげていくかに着目しよう、と。つまりケアマネジメントにおけるファシリテーションですね。

田尻
そうですね。なかなかできる人は少ないんじゃないですか？

高室
少ないと思います。部分的にやってる人はいるんですがね。さっきの梅屋敷米の話はすごく素敵ですね。カラーズさんでそれに参加した人たちとつながると同時にそこに来た人達がつながっていくということ、言葉だけでも応援することは大事です。

田尻
そうですね。

高室
今のケアマネさんや事業者さんはどこかがやってくれないかなあと待っています。

田尻
そういう意味ではジレンマというか、業界がまだまだ閉鎖的だと感じます。大田区は工場の町ですから工業関係の方とも仲がいいんです。

高室
下町の町工場ですか？

田尻
そうです。町工場の方たちです。なんと、超元気で楽しいです。介護のことをセミナーさせてもらったりしています。

高室
来てくれますか？

田尻
はい、皆さん来てくださいます。皆さんにも介護は身近な問題だったりするので、結構真剣に聞いてくださいます。あとは個人的にも相談してもらえるような関係性ができます。

高室
参加される方は 50 代～ 60 代ですか？

田尻
青年部の方ともお知合いですから、40 代～ 50 代が多いです。商店街、工業、商工会議所、住民団体などいろんなところと接点を持ってやらせていただいていますので、世間が広がりますね。
ゆるーくつながっていくことでいろいろ生まれていくこともあります。

地域とつながること、利用者を支えることをどう連動させるか

高室
先日「キューポラのある町」という埼玉県川口市の映画を観ました。吉永小百合さんが若かったころの作品です。あの少年時代が今の 80 代ですね。戦中時代、町が焼け野原になるのをかろうじて免れた。
その人たちのことを理解したいために見ました。その人たちを十分に理解できないのに支えようとしているのは果たしてどうだろうかと思いますね。

田尻
そうですね、自分が全部背負おうとしてますね。そこをマインドから変えていかなければなりません。いつまでも介護士側で支援することで成り立っているというスタイルは目指すところではありません。

高室
そうですね。

田尻
究極的に言えば、専門職は陰からそうっと見守るだけでいいと思います。

高室

そうですね、必要なときだけに支援するということですね。

田尻

そうそう、そうなんです。先生がおっしゃる通り利用者さんと地域をつなげてあげるというほうが大事ですね。

高室

例えばヘルパーさんでも、その人がずっとうちにいるのであれば、近所のどこどこでこんなものを売っていましたよとか、今日はあそこの交差点でこんなことがあったそうですよとか。話題を持って行くことが大切ですね。

田尻

本当です。できるヘルパーさんはお米の購入に困っている利用者さんに、近所の〇〇米屋さんは配達してくれますよとかの情報を提供しています。

高室

そう、情報なんですよ！

田尻

それで利用者さんはお米を自分で購入することができるようになったんです。いつまでもヘルパーが買い物支援をしなくてもよくなったということです。地域の社会資源と利用者さんをつなげることができれば「win-win」ですね。

カラーズ COLORS

（株）カラーズ
〒143-0015　東京都大田区大森西 6-2-2　ST ビル 1 階
http://www.colors-g.co.jp/

高室成幸の「お邪魔します」対談

第３回　15 年先の訪問介護と在宅ケアのあり方は？

ゲスト　㈱カラーズ田尻久美子さん

介護・医療・福祉分野でユニークな活躍で注目を集める
キーパーソンを迎えてのざっくばらんな本音の対談！
はじまりはじまり・・・！！！
第１回は東京都大田区で大活躍の（株）カラーズの田尻久美子さんです。

訪問介護の 10 年～ 15 年先を考える

高室
訪問介護の 10 年、15 年後はどうなっていると思いますか？

田尻
どうでしょう、同業の人たちの中では訪問介護は無くなっているのではないかと話しています。訪問介護って昔あったよね。という感じでしょうか。

高室
なぜそう思いますか？

田尻
ヘルパーさんが高齢化してたり、なり手がなかったりで、そういう声も聞こえています。

高室
田尻さんとしてはどう思われますか？

田尻
考えたことがなかったですね。でもやっぱりなり手が減っていますね。

高室
それは全国で言われています。なぜだと思われますか？理由は若い人が入ってこないからですか？

田尻
そうですねぇ、やはりきついイメージがあります。実際きついですからね。

高室
障がい者向けなどゼロにはならないでしょうが、今のような形での提供の仕方は無理でしょうね。

田尻
そうですね。包括報酬になるのではないでしょうか。先日も田中滋先生の研究会で話題になっていました。

高室
私は生活援助、身体介助は形を変えるんじゃないかと思います。今まで生活援助はやる人も財源もありました。食事、掃除、洗濯などは「外注化」してもよいと思います。

田尻
今、総合事業でそういう流れが来ています。ボランティア（有償ボランティア）の方々が住民主体のサービスに切り替わってきています。

高室
とはいっても初めての家に行ってボランティアの人が洗濯できますか？しかもお漏らしをしたものの洗濯です。普通ではできないでしょう。

田尻
（笑い）

高室
私はもっとコンパクトな全自動洗濯機（乾燥機付き）が配布されるのではと思っています。

田尻
なるほど！

高室
利用者さんは家にいるのだから寝る前でもスイッチを入れておけばそれで終わるのですからね。

田尻
なるほどそうですね。

高室
食事にしてもヘルパーさんは料理に困っています。そこは生活協同組合などのように、材料とレシピをパックで提供するとか。また重度の治療食は食品メーカーが病状ごとの食事を作って業者を通じて配達して、レンジでチンして、ハイ完成！（笑）。

田尻
それはいいですね。今でも食事の依頼は減ってきています。配食などを利用される方が増えています。

高室
掃除も行政が作った「お掃除体操」を取り入れて、掃除をすることが自立支援につながる、なんてね。勿論、大変な人は業者が対応するというのはどうでしょうか？

田尻
なるほど（笑）切り離されていくんですね。

高室
そういうやり方も1つです。ヘルパーさんが減ってくれば仕方ない部分もあります。

田尻
う～ん、そうですね。

高室
ただ食事介助や身体介護については変更できませんね。

田尻
介護ロボットも難しいところはありますね。

高室
身体介護で大変なところは何ですか？

田尻
そうですねえ、食事介助は3食ですし、排せつもあります。起床、就寝介助もあります。あと入浴介助のご依頼はたくさんあります。

高室
あぁこればっかりはね・・・・・。そこをどうするかですね。

田尻
そうですね。でも自宅にいつまでも住み続けていらっしゃりたい方々のお気持ちを考えると支援していきたいなと思います。

在宅志向が変わってくる

高室
先々は自宅でなくてもいいよ、持ち家でなくてもいいという方も増えてくると思います。自宅に対する感覚が変わってきている気がします。今はマンション住まいの方も増えてきて引越慣れもしています。

田尻
確かにそうですね。

高室
自宅という感覚が違ってくると思います。在宅志向や持ち家志向というものも変わってくるのでしょうね。

田尻
そうですね。安心した環境で暮らすのでしたらサービス付き高齢者向け住宅なんかがいいんじゃないでしょうか？

高室
そういうことも踏まえて、この先は訪問介護事業者が残るためにはどうしたらよいと思われますか？

田尻
やっぱり専門的な分野が残っていくのでしょうね。自立支援というのは間違いないと思います。重度が4とか5になったときですね。でも重度でも自立支援の介入という考え方でよいのでしょうか？

要介護になっても自立（自律）した暮らしができるための準備を始めよう

高室
自立支援の支援の仕方についてもこれから変えていかないといけません。今の40代～60代の人たちは健康志向の人が多いです。自分で何でもやりたいという人が要介護1とか2になったときでも自分でやれますよという教育を今からやったらいいと思います。そうすると慌てなくて済みます。

田尻
確かにそうですね。いいと思います。自立して生きていくための教育ですね。

高室
そうそう。子供に資産を残すよりはずっといいと思います。

田尻
そうですね。たぶんそうなっていくでしょうね。今までの介護とはだいぶ変わるでしょうね。なんでも選択できる世代へと移り自己選択も多くなるでしょう。

高室
つまり自立と自律なんです。つまり「自分で行う」ということと「自己選択ができる」こと、両方を支援するべきですね。明治の人のほうがそういう考え方ができていましたね。

田尻
そうですね。

高室
今の人のほうがサービスだからといってできることもお願いされるのですね。

田尻

はいそうです。社会保障制度で保証されるものだというところが難しくさせている気がします。

高室

あぁ・・・・・。

田尻

業者さんのサービスは明確ですが、社会保障制度だと保証されていると思っています。

高室

権利と思っているのですね。そこをどう変えていくか。田尻さんの世代ではそういう権利意識が強いですか？

田尻

どうなのでしょう？　私たちの世代は、将来の老後に対して希望があるような言われ方をされてきていないので「年金もなくなるのではないか」とか、「少子高齢化で看てくれる人もいなくなるとか」、そんなにしてもらえるとは思っていない感じです。

高室

期待もしていない？

田尻

そうです。だから個人で蓄えておかないといけない、備えていなければいけない、と考えている人の方が多い気がします。

高室

それは田尻さんが介護関係の仕事をしておられるし、ビジネスパーソンの経験もお持ちですからそう思われるのですね。ところが中高年のひきこもり 61 万人問題もあります。引きこもりの 8 割が男性です。

田尻

う～ん、そうですね。私たちはどうしたらいいでしょう？引きこもりの問題がうまくいけば人材不足も解消されますね。

ひきこもりの人への支援と家族介護への報酬の支払いというアイデア

高室

引きこもりの人が働きやすい就労のあり方を考えるべきですね。例えば週 3 日出勤とか、分業したり得意なことのみを取り入れると参加しやすいですね。

ベーシックインカムではありませんが、給金は出しますから週 3 日出勤してください。というと生活保護に近いですが就労義務化という風なものがあってもいいのではと思っています。あと一つ私のアイデアですが、家で介護をなさっている中高年の方に給料を払えばいいのではありませんか。

田尻

ほう！

高室

給与をいただくことで年金が支払えます。健康保険にも加入できます。残った金額が自分の自由になるお金になります。

田尻

なるほど。

高室

給与を払う条件として、ケアマネが入っていることが条件です。そして日中デイサービスに出かけているときはご自分も他のデイサービスで就労してもらってもかまわない。ただし条件が一つあります。必ず 3 ヶ月か半年に一度、行政主催の「介護技術研修会」に参加すること、それとケアカウンセリングを受けることです。それを義務化すれば、家での事故とか虐待、殺人を抑制することができる、と思います。やがて親が施設に入ったり亡くなったらフルで働ける。週 4 ～ 5 日は働いてもらえるわけです。収入が 0 ではないのでいいと思います。

ただ、その間訪問介護さんは入らないので申し訳ない。でも保険者にしてみれば訪問介護が入らなくても家族介護者に支払っているので同じですよね。

田尻

そうですね。本当はもっと資源があるはずなのに、活用できていない部分があって、そういった介護者の力を借りないとどうにもならない時代になってしまうと思います。

高室

それと訪問介護事業所の人たちは介護家族ごとに担当制にして、コンサルテーションとか様子を見て収入を得るようにしていくといいですね。

田尻

そうですね。

終末期をどのように迎えるか・支える

高室

最後に一つ、私は今全国の研修会で「あなたが看取りの時にどういう曲を聴きながら最期を迎えたいですか？」を聞いています。

田尻

えェ～！

高室

面白いですよ。ある人は宇宙戦艦ヤマトでした。

田尻

（笑い）

高室

♪さらばー地球よー♪と歌いながら逝きたい。ある人はロッキーのテーマ、ある人は映画「トップガン」のテーマ曲。いずれも割と元気な音楽が多いです。

田尻

へえー！

高室

「千の風に乗って」はだれも言いません。悲しくなるからでしょうか…（笑）。

田尻

なるほどねー。

高室

ホントに面白いです。人によって全く違うのです。田尻さんだったらもう最期を迎えるときにどんな音楽を聴きたいですか？

田尻

悩みますねえ。なんだろう？家族で聞いていた曲でしょうね。「パプリカ」という歌があるのをご存知ですか？オリンピックの応援ソングです。

高室

知らなかったです。

田尻

子供たちが歌っている曲ですが、とても元気な曲です。

高室

この曲を最後に？

田尻

子供たちが歌っているのをいつも聞いているからです。

高室

それはその曲というよりも、子供たちの歌声を聴きながら最期は逝きたいということですか？

田尻

はい。いいですね、録音しておこうかな（笑）。高室

ぜひとも！！素敵だと思います。

本日はお忙しいところ、ありがとうございました。ますますのご活躍、応援しています。

カラーズ COLORS

（株）カラーズ
〒143-0015　東京都大田区大森西 6-2-2　ST ビル 1 階
http://www.colors-g.co.jp/